

# 初期仏典における十支縁起説の成立

四食説及び識住説との関連から

仲宗根 充 修

## 〔抄 録〕

本論では、初期仏典において十支縁起説がどのように成立したのかについて検討する。十支縁起説の軸となる「識」と「名色」の縁起関係の成立を検証すべく、始めに古層韻文文献、続いて散文文献に見られる用例を考察する。散文文献では、五支縁起説と三事合説とを組み合わせた構造を持つ縁起説、さらに五蘊説に説かれる「識」と「名色」の関係を考察し、最後に四食説及び識住説において成立した「識」と「名色」の縁起関係を軸に十支縁起説が成立する過程を検討する。

**キーワード：**初期仏典，十支縁起，三事合合，五蘊，四食，識住

## 1．問題の所在

十二支縁起説は支分の少ない縁起説から支分を増幅・発展させて成立したものと考えられる。特に十支縁起説から発展して十二支縁起説が成立する過程については、これまでいくつかの研究がなされている<sup>1)</sup>。しかし、「識」と「名色」の縁起関係を軸とする十支縁起説がどのような過程を経て成立したのかについては未だ問題を残している。

小論では、特に四食説及び識住説との関連に着目しながら、どのような過程を経て「識」と「名色」の縁起関係を軸とする十支縁起説が成立したのかについて検討する。

## 2．古層韻文文献に見られる「識」と「名色」

最古層文献とされる Sn Pārāyanavagga には、「識」と「名色」の関係を説く偈頌が見られる。

“Yam etaṃ pañhaṃ apucchi, Ajita taṃ vadāmi te,  
yattha nāmañ ca rūpañ ca asesam uparujjhati:

viññāṇassa nirodhena etth' etaṃ uparujjhati.”<sup>2)</sup>

アジタよ、あなたが質問したことを、名と色が残りにく滅びるところを、私はあなたに語ろう。識の止滅によって、そのところにこれ（名と色）が滅びる。

ここでは「識の止滅によって、そのところにこれ（名と色）が滅びる」と説かれていることから、「識」と「名色」の縁起的な関係が成立していると考えられる<sup>3)</sup>。

次に、散文文献に見られる「識」と「名色」の関係を考察する。散文文献では「識」は三事 and 合説や五蘊説などにおいて頻繁に登場する。それらの中で「識」と「名色」がどのような関係にあるのかについて考察する。

### 3．三事 and 合説と縁起説

縁起説の発展を考える場合、三事 and 合説と五支縁起説とを組み合わせた構造を持つ縁起説が重要な意味を持つと考えられる<sup>4)</sup>。SN XII 43 Dukkha, 44 Loko, 45 Nātika<sup>5)</sup>には次のような縁起説が説かれている。

Cakkhum ca paṭicca rūpe ca uppajjati cakkhuvīññāṇam // tiṇṇaṃ saṅgatiphasso //  
phassapaccayā vedanā // vedanāpaccayā taṇhā /// Tassāyeva taṇhāya asesavirāgaṇirodhā  
upādānaṇirodho // upādānaṇirodhā bhavaṇirodho // bhavaṇirodhā jātinirodho// jātinirodhā  
jarāmaṇaṇam sokaparidevadukkhadomanassupāyāsā nirujjhanti /// Evam etassa kevalassa  
dukkhakkhandhassa nirodho hoti ///<sup>6)</sup>

眼と色に縁って眼識が生ずる。三事 and 合が触である。触の縁から受がある。受の縁から渴愛がある。まさにこの渴愛の残りにない離貪から取の滅がある。取の滅から有の滅がある。有の滅から生の滅がある。生の滅から老死、愁悲苦憂惱が滅する。このようにこの全ての苦蘊の滅がある。

ここでは「眼 + 色 眼識 三事 and 合触 受 渴愛」「渴愛滅 取滅 有滅 生滅 老死、愁悲苦憂惱滅」という構造になっており、三事 and 合説と五支縁起説とを組み合わせた構造になっている。この經典に見られる「眼 + 色 眼識 三事 and 合触 受...」という構造は、十支縁起説の「識 名色 六処 触 受...」という構造とは異っていることがわかる。

したがって、「識」と「名色」の縁起関係を軸とする十支縁起説は、三事 and 合説に見られる「根 + 境 識」という構造から「識 名色 六処」という構造へと改変される過程を経て、成立することになると考えられる。

## 4. 五蘊説と縁起説

SN XXII 56 Upādānam parivaṭṭam, 57 Sattaṭṭhāna には五蘊に関する四諦説が説かれている。これらの経典では、「識」と「名色」の関係について、次のように説かれている。

Āhārasamudayā rūpasamudayo // āhāranirodhā rūpanirodho // ... // Phassasamudayā vedanāsamudayo phassanirodhā vedanānirodho //... // Phassasamudayā saññāsamudayo phassanirodhā saññānirodho // Phassasamudayā sañkhārasamudayo // phassanirodhā sañkhāranirodho // ... // Nāmarūpasamudayā viññāṇasamudayo // nāmarūpanirodhā viññāṇanirodho //<sup>7)</sup>

食の集起から色の集起がある。食の滅から色の滅がある。…触の集起から受の集起がある。触の滅から受の滅がある。…触の集起から想の集起がある。触の滅から想の滅がある。…触の集起から行の集起がある。触の滅から行の滅がある。…名色の集起から識の集起がある。名色の滅から識の滅がある。

ここでは nāmarūpasamudayā viññāṇasamudayo (名色の集起から識の集起がある)、nāmarūpanirodhā viññāṇanirodho (名色の滅から識の滅がある)と説かれており、「名色集起 識集起」という関係が見られる。これは一般的な十二支縁起説に見られる viññāṇapaccayā nāmarūpapaccayo (識の縁から名色がある)、viññāṇanirodhā nāmarūpanirodho (識の滅から名色の滅がある)という関係とは逆の関係を示すものである。ちなみに、āhārasamudayā rūpasamudayo (食の集起から色の集起がある)という関係は、後述する SN XII 64 Aṭṭhirāgoに見られるような「四食 … 名色」という関係と共通する考え方である。

したがって、五蘊説を考察した結果、「名色の集起から識の集起がある」とする場合があります<sup>8)</sup>、そこには一般的な十二支縁起説に見られる「識」と「名色」の関係とは逆の関係が見られることがわかった。それでは一般的な十二支縁起説に見られる「識」と「名色」の縁起関係は、どのような過程を経て成立したのだろうか。

## 5. 十支縁起説の成立

### (1) 四食説と縁起説

四食とは、kavalīnkārāhāra (段食)、phassāhāra (触食)、manosañcetanāhāra (意思食)、viññāṇāhāra (識食)の四つである。初期仏典に見られる四食説には縁起説中の支分として現れるものも多い。四食説と縁起説の関係についてはこれまでにいくつかの研究が見られる<sup>9)</sup>。荒牧は SN XII 38, 39 の経典が、相互依存関係における「識」と「名色」として定義される縁起

の基本概念の形成過程を創始したとし、これらの經典から SN XII 64 Atthirāgo の經典へ発展したと論じている<sup>10)</sup>。また宮坂は「縁起の支分としてきわめて重要な意義を有する食も、実は思想的に完備された十二支縁起の変形におけるそれと解するのは、むしろ逆の見かたなのであって、食を起点とする逆観縁起にこそ、古い原初的な形態を認めるべきであると思うのである」と述べている<sup>11)</sup>。さらに平川は SN XII 12 Phagguno に説かれる縁起説について、「識と未来世の再生、次に六処を説く説を縁起説に当てはめれば、識・名色・六処・触・受の系統の縁起説となる。即ち、再生するものを『名色』と見るのである」と述べ、さらに『雜阿毘曇心論』巻十に「識者長養名色故説食<sup>12)</sup>」と説かれているのを引用して、これについて「未来再生の『有』を名色と見ている。これは『識を縁として名色あり』と説いてよいものである。上述の四食の説では、『識食を縁として、未来の有があり、未来の有を縁として六処がある』と見ているのであるが、この説には、識の次に名色を立てる説に移る契機が含まれていると見てよい」と述べている<sup>13)</sup>。さて、平川が挙げた SN XII 12 Phagguno には次のような縁起説が説かれている。

evaṃ mam avadantaṃ yo evaṃ puccheyya Kissa nu kho bhante viññāṇāhāro ti // esa kallo pañho // Tatra kalam veyyakaraṇam // Viññāṇāhāro āyatim punabbhavābhiniḅattiyā paccayo // tasmim bhūte sati saḷāyatanaṃ saḷāyatanapaccayā phasso ti // <sup>14)</sup>

このように私は説かないのであるから、このように尋ねるべきである。「何に対して<sup>15)</sup> 識食があるか」と。これは適切な問いである。それに対する適切な答えがある。「識食は未来における後有の再生の縁である。これ(後有の再生)があるとき、六処がある。六処の縁から触がある」と。

ここでは「識食は未来における後有の再生の縁である」と説かれており、「識食 後有の再生 六処 触」という関係が示され、これに続いて「受 渴愛 取 有 ... 苦蘊の集起」という関係が示されている。平川はここに説かれる「識食」と「未来の後有の再生」の関係を「識」と「名色」の関係として見ているが、「識食」と「名色」の関係はむしろ SN XII 63 Puttamaṃsa に明確な形で説かれていると考えられる。

Viññāṇe bhikkhave āhāre pariññāte nāmarūpam pariññātaṃ hoti // nāmarūpe pariññāte ariyasāvakaṃsa natthi kiñci uttarimkaraṇiyanti vadāmiti // <sup>16)</sup>

比丘たちよ、識食が遍知される時、名色が遍知される。名色が遍知される時、聖声聞にとって、もはやなすべきことはない私は説く。

ここでは四食説が縁起説の支分として説かれてはいないが、「識食が遍知される時、名色が遍知される」と説かれていることから<sup>17)</sup>、「識食」と「名色」の縁起的な関係が成立しているこ

とがわかる。

先述したように、SN XII 12 Phagguno では「識食は未来における後有の再生の縁である」と説かれていたが、SN XII 64 Atthirāgo でも、四食を起点として未来の後有の再生へと至る縁起説が説かれており、またそこには「識」と「名色」の縁起的関係がより明確な形で説かれている。

Kabalīṃkāre (Phasse, Manosañcetanāya, Viññāṇe) ce bhikkhave āhāre atthi rāgo atthi nandi atthi taṇhā patiṭṭhitam tattha viññāṇaṃ virūḷhaṃ // // Yattha patiṭṭhitam viññāṇaṃ virūḷhaṃ // atthi tattha nāmarūpassa avakkanti // Yattha atthi nāmarūpassa avakkanti atthi tattha saṅkhārāṇaṃ vuddhi // Yattha atthi saṅkhārāṇaṃ vuddhi atthi tattha āyatim punabbhavābhiniḃbatti // Yattha atthi āyatim punabbhavābhiniḃbatti atthi tattha āyatim jātijarāmaṇaṃ // Yattha atthi āyatim jātijarāmaṇaṃ sasokantam bhikkhave sadaraṃ saupāyāsanti vadāmi // //<sup>18)</sup>

比丘たちよ、段食（触食、意思食、識食）に対する貪欲・喜悅・渴愛があるところには、識の安住・増長がある。識の安住・増長があるところには、名色の顕現がある。名色の顕現があるところには、諸行の増上がある。諸行の増上があるところには、未来における後有の再生ある。未来における後有の再生があるところには、未来における生老死がある。未来における生老死があるところには、比丘たちよ、愁悲悩があると私は説く。

ここでは「四食に対する貪欲・喜悅・渴愛 識の安住・増長 名色の顕現 諸行の増上 未来における後有の再生 未来における生老死 愁悲悩」という構造が見られ、また「識」と「名色」の縁起的関係が成立していると考えられる<sup>19)</sup>。さらにここでは patiṭṭhitam viññāṇaṃ virūḷhaṃ（識の安住・増長）という語が示すように、四食説とともに識住説が説かれていることがわかる。

以上の考察の結果、四食説が縁起説の発展において重要な役割を担っていることがわかった。そして「四食」特に「識食」と「名色」の縁起的関係が成立していることは非常に重要であると考えられる<sup>20)</sup>。しかしながら、さらに整備された縁起説では、四食説は「渴愛」との縁起関係において説かれるようになる<sup>21)</sup>。

## （ 2 ） 識住説と縁起説

SN XXII 53, 54, 55 には、Rūpupāyam ... viññāṇaṃ tiṭṭhamānaṃ tiṭṭheyya rūpārammaṇaṃ rūpapatiṭṭhaṃ nandupasevanaṃ virūḷhiṃ vuddhiṃ vepullam āpajjeyya<sup>22)</sup>（識は色を求めて住しつつ、住するであろう。色を所縁とし、色に安住し、喜悅を求めて、増長し、増上し、広大になるであろう）という識住説が説かれている<sup>23)</sup>。識住説と縁起説の関係についてはこれまでにいくつかの研究が見られる<sup>24)</sup>。梶山は「この四識住説はそれ自体が識と色・受・想・行の相依

を語る一種の縁起説であるが、それが有支縁起における識と名色との相依を説明するために有支縁起の中に導入された」と述べており<sup>25)</sup>、荒牧は SN XXII 54 Bijam に見られる四識住説は SN XII 38, 39 の経典から発展したと論じている<sup>26)</sup>。この識住説と関係する縁起説が SN XII 38 Cetanā (1) に見られる。

Yañ ca kho bhikkhave ceteti yañ ca pakappeti yañ ca anuseti // ārammaṇam etaṃ hoti viññāṇassa ṭhitiyā // ārammaṇe sati patiṭṭhā viññāṇassa hoti // tasmim̐ patiṭṭhite viññāṇe virūḷhe āyatim̐ punabbhavābhiniḃbatti hoti // āyatim̐ punabbhavābhiniḃbattiyā sati āyatim̐ jātijarāmaṇaṃ sokaparidevadukkhadomanassupāyāsā sambhavanti //<sup>27)</sup>

比丘たちよ、人が思量し、分別し、随眠するもの、これは識の住の所縁である。所縁があるとき、識の安住がある。この識の安住・増長があるとき、未来における後有の再生がある。未来における後有の再生があるとき、未来における生老死、愁悲苦憂悩が生成する。

ここでは「...所縁 識の安住・増長 未来における生老死、愁悲苦憂悩」という構造が見られ、これは「識 ... 有 生 老死、愁悲苦憂悩」を説く十支縁起説の構造と基本的に一致するものであるが、viññāṇassa ṭhiti (識の住) viññāṇassa patiṭṭha (識の安住) という語から識住説が説かれていることがわかる。このような「識住」から「未来における生老死、愁悲苦憂悩」へと至る縁起説は、SN XII 40 Cetanā (3) にも見られる。

Yañ ca kho bhikkhave ceteti yañ ca pakappeti yañ ca anuseti // ārammaṇam etaṃ hoti viññāṇassa ṭhitiyā // ārammaṇe sati patiṭṭhā viññāṇassa hoti // //  
Tasmim̐ patiṭṭhite viññāṇe virūḷhe nati hoti // natyā sati āgatigati hoti // āgatigatiyā sati cutūpāpato hoti // cutūpāpāte sati āyatim̐ jāti jarāmaṇaṃ sokaparidevadukkhadomanassupāyāsā sambhavanti // //<sup>28)</sup>

比丘たちよ、人が思量し、分別し、随眠するもの、これは識の住の所縁である。所縁があるとき、識の安住がある。この識の安住・増長があるとき、繫著がある。繫著があるとき、来往がある。来往があるとき、死生がある。死生があるとき、未来における生老死、愁悲苦憂悩が生成する。

ここでは「...所縁 識の安住・増長 繫著 来往 死生 未来における生老死、愁悲苦憂悩」という構造であり、「識住」から「未来における生老死、愁悲苦憂悩」へと至る縁起説が見られる<sup>29)</sup>。このような「識住」から「未来における生老死、愁悲苦憂悩」へと至る縁起説は、SN XII 39 Cetanā (2) にさらに整備された形として見られる。

Yañ ca kho bhikkhave ceteti yañ ca pakappeti yañ ca anuseti // ārammaṇam etaṃ hoti  
viññāṇassa t̥hitiyā // ārammaṇe sati patiṭṭhā viññāṇassa hoti // tasmim̐ patiṭṭhite viññāṇe  
virūl̥he nāmarūpassa avakkanti hoti // //

Nāmarūpapaccayā saḷāyatanam̐ // // Saḷāyatanapaccayā phasso // // Phassapaccayā vedanā // ...<sup>30)</sup>

比丘たちよ、人が思量し、分別し、随眠するもの、これは識の住の所縁である。所縁があるとき、識の安住がある。この識の安住・増長があるとき、名色の顯現がある。名色の縁から六処の縁がある。六処の縁から触がある。触の縁から受がある。...

ここでは「...所縁 識の安住 名色 六処 触 受 渴愛 取 有 生 老死、愁悲苦憂惱」というように十支縁起説とほぼ同じ構造が見られる<sup>31)</sup>。ここでもまた「識の住」「識の安住」という語からわかるように識住説が説かれており、「識の住」あるいは「識の安住」と「名色」の縁起的關係が成立していることがわかる。ここに説かれる tasmim̐ patiṭṭhite viññāṇe virūl̥he nāmarūpassa avakkanti hoti（この識の安住・増長があるとき、名色の顯現がある）という表現は、先に考察した SN XII 64 Atthirāgo において説かれる yattha patiṭṭhitam̐ viññāṇam̐ virūl̥ham̐ atthi tattha nāmarūpassa avakkanti（識の安住・増長があるところには、名色の顯現がある）という表現と内容的に合致する。

さて次に、この識住説を手がかりに、DN xv Mahānidāna-Suttanta (MNS) に説かれる「識」と「名色」の縁起關係を考察してみる。この經典に説かれる縁起説は基本的構造として「老死 生 有 取 渴愛 受 触 名色 識」という構造を持ち、胎生學的縁起説が説かれ、それに伴って「識」と「名色」の相互依存關係が成立している。

“ Viññāṇa-paccayā nāma-rūpaṃ ti ” iti kho pan’ etaṃ vuttaṃ tad ānanda iminā p’ etaṃ  
pariyāyena veditabbaṃ yathā viññāṇa-paccayā nāma-rūpaṃ. Viññāṇam̐ va hi ānanda mātu  
kucchiṃ na okkamissatha, api nu kho nāma-rūpaṃ mātu kucchismiṃ samucchissathāti? ’

‘ No h’ etaṃ bhante. ’

‘ Viññāṇam̐ va hi ānanda mātu kucchiṃ okkamitvā vakkamissatha, api nu kho nāma-rūpaṃ  
itthattāya abhinibbattissathāti? ’

‘ No h’ etaṃ bhante. ’

‘ Viññāṇam̐ va hi ānanda daharassa’ eva sato vocchijjissatha kumārassa vā kumārīkāya vā,  
api nu kho nāma-rūpaṃ vuddhiṃ virūl̥hiṃ vepullaṃ āpajjissathāti? ’

‘ No h’ etaṃ bhante. ’

‘ Tasmāt ih’ ānanda es’ eva hetu etaṃ nidānam̐ esa samudayo esa paccayo nāma-rūpassa,  
yadidaṃ viññāṇam̐. ’

“ Nāmarūpa-paccayā viññāṇaṃ ti ” iti kho pan’ etaṃ vuttaṃ tad ānanda iminā p’ etaṃ

pariyāyena veditabbaṃ, yathā nāmarūpa-paccayā viññāṇaṃ. Viññāṇaṃ va hi Ānanda nāma-rūpe patitṭhaṃ nālabhissatha, api nu kho āyati jāti-jarā-maraṇa-dukkha-samudaya-sambhavo paññāyethāti? ’

‘No h’ etaṃ bhante.’

‘Tasmāt ih’ Ānanda es’ eva hetu etaṃ nidānaṃ esa samudayo esa paccayo viññāṇassa, yadidaṃ nāmarūpaṃ.’<sup>32)</sup>

「『識の縁から名色がある』とこのように言ったが、アーナンダよ、それは次の理由によって、識の縁から名色があるというように知るべきである。アーナンダよ、識が母胎に入らなかったならば、名色は母胎の中で育つだろうか」

「そのようなことはありません、尊師よ」

「アーナンダよ、識が母胎に入った後に逸れたならば、名色はこの状態に生まれ変わるだろうか」

「そのようなことはありません、尊師よ」

「アーナンダよ、識がまだ若い少年あるいは少女に対して断たれたならば、名色は増上し、増長し、広大になるだろうか」

「そのようなことはありません、尊師よ」

「アーナンダよ、したがって、ここにおいて、これこそが名色の原因であり、因縁であり、集起であり、縁である。すなわち、識である。

『名色の縁から識がある』とこのように言ったが、アーナンダよ、それは次の理由によって、名色の縁から識があるというように知るべきである。アーナンダよ、もしも、識が名色において安住を得ないならば、未来における生老死苦の集起・生成が認められるだろうか」

「そのようなことはありません、尊師よ」

「アーナンダよ、したがって、ここにおいて、これこそが識の原因であり、因縁であり、集起であり、縁である。すなわち、名色である」

ここでは、「識の縁から名色がある」と説く根拠を、識が母胎に入らなかったならば、名色は母胎の中で育たないから、識が母胎に入った後に逸れたならば、名色はこの状態に生まれ変わらないから、識がまだ若い少年あるいは少女に対して断たれたならば、名色は増上し、増長し、広大にならないからと説明している。このうち三つ目の‘ Viññāṇaṃ ... vocchijjissatha ... nāma-rūpaṃ vuddhiṃ virūḥiṃ vepullaṃ āpajjissathāti?’ (識が...断たれたならば、名色は増上し、増長し、広大になるだろうか) という考え方は、先述した SN XXII 53, 54, 55 に説かれる rūpupāyam ... viññāṇaṃ tiṭṭhamānaṃ tiṭṭheyya ... rūpapatitṭhaṃ ... virūḥiṃ vuddhiṃ vepullaṃ āpajjeyya (識は、色を求めて住しつつ、住するであろう。...色に安住し、...増長し、増上し、広大になるであろう) という識住説と類似した考え方であることがわかる。



また、「名色の縁から識がある」と説く根拠を、識が名色において安住を得ないならば、未来における生老死苦の集起・生成が認められないからと説明しており、これは先に考察した SN XII 38 Cetanā (1) で *tasmiṃ patitṭhite viññāṇe virūlḥe āyatim punabbhavābhiniḥbatti hoti* (この識の安住・増長があるとき、未来における後有の再生がある) と説かれ、この還滅において、*tad apatitṭhite viññāṇe avirūlḥe āyatim punabbhavābhiniḥbatti na hoti* (この識の安住・増長がないとき、未来における後有の再生はない) と説かれていることと共通しており、識住説を根拠としていることがわかる。このような「識の安住」から「未来における生老死苦」へ至るという考え方は、SN XII 38 Cetanā (1), 39 Cetanā (2), 40 Cetanā (3) に説かれる縁起説と共通した考え方である<sup>33)</sup>。したがって、MNS に説かれる縁起説は、識住説を根拠として胎生学的縁起説が説かれ、それに伴って「識」と「名色」の相互依存関係が成立していると考えられる<sup>34)</sup>。

以上の考察の結果、識住説は縁起説と密接な関係をもって説かれる場合があるとわかった。そして識住説は四食説と同様に十支縁起説の成立に関して重要な役割を担っていると考えられる。

## 6 . 小結

最古層文献とされる Sn Pārāyanavagga には、*viññāṇassa nirodhena etth' etaṃ uparujjhati* (識の止滅によって、そのところにこれ(名色)が滅びる)という句が見られ、そこには既に「識」と「名色」の縁起的な関係が成立していると考えられる。

初期仏典に見られる縁起説を考察した結果、四食説及び識住説において成立した「識」と「名色」の縁起関係を軸に十支縁起説が成立した可能性があると考えられる。

また、MNS に説かれる縁起説は識住説を根拠として胎生学的縁起説が説かれ、それに伴って「識」と「名色」の相互依存関係が成立していると考えられる。

今後は、縁起説における認識論的解釈と胎生学的解釈、さらに「識」と「名色」の相互依存関係についてさらに考察し、検討することが課題となる。

## Abbreviations

AKBh	Prahlad Pradhan, ed. <i>Abhidharmakośābhūṣya of Vasubandhu</i> , Patna, 1967.
AKV	U. Wogihara, ed. <i>Sphuṭārthā Abhidharmakośavyākhyā by Yaśomitra</i> , Tokyo, 1936. Reprint, 1989.
AN	Āṅguttara-Nikāya, PTS.
DN	Dīgha-Nikāya, PTS.
Kv	Kathā-vatthu, PTS.

MN	Majjhima-Nikāya, PTS.
Nett	Netti-pakaraṇa, PTS.
Nidd I	Mahā- niddesa, PTS.
Nidd II	Culla-niddesa, PTS.
NidSa	See Tripāṭhi [1962]. ( スートラ番号については Tripāṭhi [1962] に従う )
Ps	Papañca-sūdanī, PTS.
SN	Saṃyutta-Nikāya, PTS.
Sn	Sutta-nipāta, PTS.
Spk	Sārattha-ppakāsinī, PTS.
Ss	Sāra-saṅgaha, PTS.
T	大正新脩大蔵経
Ud	Udāna, PTS.
Udāna-v	Udānavarga, ed. F. Bernhard, Göttingen, 1965.
Vism	Visuddhi-magga, PTS.

## Works Consulted

- Aramaki, Noritoshi ( 荒牧典俊 )
- 1985 ON THE FORMATION OF A SHORT PROSE PRATĪTYASAMUTPĀDA SŪTRA.  
*Buddhism and its relation to other religions, Essays in honour of Dr. Shozen Kumoi on his seventieth birthday* ( 『雲井昭善博士古希記念 仏教と異宗教』 ) 平楽寺書店.
- Dietz, Siglinde
- 1984 *Fragments des Dharmaskandha: ein Abhidharma-Text in Sanskrit aus Gilgit*, Göttingen.
- Rhys Davids, C. A. F.
- 1922 *The Book of the Kindred Sayings II*, London, Reprint, 1952.
- Tripāṭhi, Chandrabhāl
- 1962 *Fünfundzwanzig Sūtras des Nidānasamyukta*. Sanskrittexte aus den Turfanfunden 8. Berlin: Akademie-Verlg.
- Waldschmidt, Ernst
- 1967 *Von Ceylon bis Turfan*, Göttingen.
- 赤沼智善
- 1939 『著作選集第一巻 原始仏教の研究』法蔵館 Reprint, 1981.
- 宇井伯壽
- 1965 『印度哲學研究 第二』岩波書店.
- 榎本文雄

- 1982 「『撰大乘論』無性釈に引用される若干の經文をめぐって 「城邑經」の展開を中心に」『佛教史學研究』24 (2) 佛教史學會.
- 梶山雄一
- 1984 「輪廻と超越 『城邑經』の縁起説とその解釈」『哲學研究』550.
- 雲井昭善
- 1967 『仏教興起時代の思想研究』平楽寺書店.
- 佐々木容道
- 1982 「アーラヤ識成立の一要因」『東洋學術研究』21-1.
- 武内義範
- 1956 「縁起説における相依性の問題」『五十周年記念論集』京都大学文学部.
- 中村元
- 1994 『中村元選集 [決定版] 第16巻 原始仏教の思想』春秋社.
- 浪花宣明
- 1989 『サーラサンガハの研究 仏教教理の精要』平楽寺書店.
- 平川彰
- 1988 『平川彰著作集第一巻 法と縁起』春秋社.
- 吹田隆道
- 1982 「梵文『大本經』縁起説の復元について」『仏教史學研究』24 (2).
- 福田 琢
- 1993 「『法蘊足論』の十二縁起説」『佛教学セミナー』57.
- 舟橋一哉
- 1962 「称友造阿毘達磨俱舍論明瞭義釈 破我品 梵文の和訳と註と梵文テキストの正誤訂正表」『大谷大學研究年報』15 大谷學會.
- 本庄良文
- 1998 「シャマタデーヴァの伝える阿含資料補遺 破我品 (上)」『神戸女子大学文学部紀要』31.
- 水野弘元
- 1997 『仏教教理研究 著作選集第二巻』春秋社.
- 宮坂宥勝
- 1971 『仏教の起源』山喜房佛書林.
- 宮本正尊
- 1974a 「原始仏教における縁起説の考察」『佛教研究』4 國際佛教徒協會.
- 1974b 「縁起説における upādāna の考察」『印度學佛教學研究』22 (2).
- 村上 (平野) 真完
- 1964 「因縁相応の梵文資料 印度古塔出土の煉瓦銘文の内容比定」『印度學佛教學研究』12 (1)
- 1965 「縁起成道資料」『印度學佛教學研究』13 (1).

- 1973 「サンスクリット本城邑経 (nagara) 十支縁起と十二支縁起(その一)」『佛教研  
究』3 国際佛教徒協会。  
森章司
- 1995 『原始仏教から阿毘達磨への仏教教理の研究』東京堂出版。  
和辻哲郎
- 1927 『原始仏教の実践哲学』岩波書店。

## 〔注〕

(1) 十支縁起説と十二支縁起説については、武内 [1956], 村上(平野) [1964], [1965], [1973], 吹田 [1982], 梶山 [1984] 参照。

(2) Sn 1037. Cf. Nett, p. 14, 17, 71; T. 1579, p. 386b25-26.

(3) これに対して Nett では、... nāmarūpaṃ viññāṇasampayuttaṃ. Tassa nirodhaṃ Bhagavantaṃ pucchanto āyasmā Ajito Pārāyane evam āha (... 名色は識と相応している。その滅について世尊に尋ねる尊者アジタが、パーラーヤナにおいてこのように言った) とし、また、Nāmarūpaṃ ca viññāṇahetukaṃ viññāṇapaccayanibbattaṃ. ... hetu upacchinno viññāṇaṃ anāhāraṃ anabhinanditaṃ apaṭṭhitaṃ appaṭisandhikaṃ, taṃ nirujjhati. Nāmarūpaṃ api ahetaukaṃ appaccayaṃ punabbhavaṃ na nibbattayati. (Nett, pp. 15-16) (名色は識を原因とし、識を縁として生起する。... 原因が断たれ、識が食なく、歓喜せず、安住せず、結生しないとき、それは滅する。名色もまた、原因がなく、縁がないとき、後有を生起させない) とある。

中村 [1994: 391] は Sn Karahavivādasutta に説かれる縁起説について「ウパニシャッドから継承した『名称と形態』の根底に想い (saññā) を求めようとしているが、その代わりに認識作用 (viññāṇa) を求めようとする動きも現れている」と述べ、さらにこの Sn 1037 偈を挙げて「これは後の十二支の説にさらに一歩近づいたものである」と述べている。この yattha nāmaṃ ca rūpaṃ ca asesam uparujjhati (名と色が残りにく滅びるところ) という定型句は SN Sagāthavagga に散見されるが、「識」との関係については述べられていない (SN p. 13 (SN I 3. 3), p. 15 (I 3. 7), p. 35 (I 5. 10), p. 60 (II 3. 4. 5), p. 165 (VII 1. 6. 4)). また、この偈は DN xi Kevaddha-Sutta の中に引用されている。Viññāṇaṃ anidassanaṃ anantaṃ sabbato pahaṃ. Ettha āpo paṭhavī tejo vāyo na gādhati, Ettha dīghaṇ ca rassaṇ ca anuṃ thūlaṃ subhāsubhaṃ, Ettha nāmaṃ ca rūpaṃ ca asesam uparujjhati, Viññāṇassa nirodhena etth' etaṃ uparujjhati. (DN I, p. 223). これに対応する漢訳には「應答識無形。無量自有光。此滅四大滅。塵細好醜滅。於此名色滅。識滅餘亦滅」(T. I, p. 102c17-19) とある。これに対して中村 [1994: 508] は「認識作用 と 名称と形態 との基礎づけの関係は明示されていないが、認識作用 のほうを、より根源的なものであると考えていたらしい」と述べている。むしろ、この経説は SN Sagāthavagga に見られる Yattha āpo ca paṭhavī // tejo vāyo na gādhati // ato sarā nivattanti // ettha vaṭṭam na vaṭṭati // ettha nāmaṃ ca rūpaṃ ca // asesam uparujjhati // (SN I, p. 15 (SN I 3. 7 Sarā) cf. Ud I. 10 = Uv XXVI. 26, 27) (水と地と火と風が確立し

ないところ、そこで(輪廻の)流れは止まる。そこで(輪廻の)転は止まる。そのところに名と色は残りなく滅びる)という経説から発展したと推測される。

また中村 [1994: 508-509] は「すでに非常に古い詩句において、最初期の仏教の発展のある時期において、認識作用は究極の原理と見なされていた」と述べ、Sn Dvayatānupassanāsutta に見られる “Yaṃ kiñci dukkhaṃ sambhoti, sabbhaṃ viññāṇapaccayā, viññāṇassa nirodhena n’ atthi dukkhassa sambhavo.” (Sn 734) (いかなる苦が生成するのも、すべて識の縁からである。識の止滅によって苦の生成はない) という偈を挙げ、「このような見解が、後に縁起の諸項目の系列をつくりあげるときに、このところにはめこまれたのである」と述べている。

- (4) 和辻 [1927: 185-186], 宮本 [1974a] 参照。水野 [1997: 37-38] は感覺知覚による認識関係に関する経説として、MN 148 Chachakka-Sutta を挙げ、この経典が認識関係の経過から渴愛の生起と滅尽を説いたものであり、十二縁起説とも関係があると思われると述べ、また「一般的縁起説は…感覺知覚の成立説を改変して発展させたと考えられるのではないかと思われる…識・名色・六処は…根(六処)・境(名色)・識と同じ内容のものであって、その列挙順序が違っているだけということになる」と述べている。
- (5) これらの経典は、SN XXXV 106 Dukkha, 107 Loko, 113 Upassuti と同一内容である。
- (6) SN II, p. 72 (SN XII 43 Dukkha). これに対応する漢訳には「云何苦集道跡。縁眼色生眼識。三事合觸。縁觸受。縁受愛。縁愛取。縁取有。縁有生。縁生老病死憂悲惱苦集。如是耳鼻舌身意。亦復如是。是名苦集道跡。云何苦滅道跡。縁眼色生眼識。三事合觸。觸滅則受滅。受滅則愛滅。愛滅則取滅。取滅則有滅。有滅則生滅。生滅則老病死憂悲惱苦滅。如是純大苦聚滅」(T. 99 (218), p. 54c22-29) とある。
- (7) SN III, pp. 59-61 (SN XXII 56 Upādānam parivaṭṭam); SN III, pp. 62-64 (SN XXII 57 Sattaṭṭhāna). これに対応する漢訳には「諸所有色。一切四大及四大造色。是名色。…觸集是受集。…謂觸集是想集。…觸集是行集。…謂名色集。是名識集」(T. 99 (41), p. 9b12-c19; T. 99 (42), p. 10a12-c2) とある。
- (8) この他にも、Nāmarūpaṃ hetu nāmarūpaṃ paccayo viññāṇakkhandhassa paññāpanāyāti (SN III, p. 102 (SN XXII 82 Puṇṇamā); MN III, p. 17 (MN 109 Mahāpuṇṇama-Sutta)) 「名色因名色縁。是故名爲識陰。所以者何。若所有識。彼一切名色縁故」(T. 99 (58), p. 14c15-17) とか、Nāmarūpasamudayā cittassa samudayo // nāmarūpanirodhā cittassa atthagamo (SN V, p. 184 (SN XLVII 42 Samudayo)) 「名色集則心集。名色滅則心没」(T. 99 (609), p.171b5-6) が見られる。
- (9) 和辻 [1927: 186-187] は SN XII 12 Phagguno に説かれる「識食あるがゆえに存在が続いて行く。存在があれば六入処があり、六入処を縁として触 受 愛 取 生 老死がある」という縁起説の系列を挙げ、「眼色 識 触という関係の引き起こす困難を脱れるために、六境と識とを省いて六入処 触という単純な関係になおした…六入処の条件として識食や存在が考えられるのである。ここに於いて条件関係を認めようとすれば、この関係を時間的事実的な関係として考えなくてはならない。これは明らかに縁起説としては失敗であった」と述べるに止めている。赤沼 [1939: 478, 481] は Pāli の Nikāya および漢訳阿含經に見られる縁起説を整理・分類しており、その中で四食を支分とする縁起説を列挙して説明している。雲井 [1967: 408-409] は SN XII 12 Phagguno に

説かれる *Viññāṇāhāro āyatim punabbhavābhiniḅattiyā paccayo* という文とこれに対する註釈を挙げて、まさしく識 名色の胎生学的解釈を意味していると述べている。中村 [1994: 482-483] は SN XII 12 Phagguno に説かれる縁起説について、「...はなはだ理解しがたく錯雑している。識別作用からの縁起を説くかのごとくでもあり、また四種類の食物(物質的な食物、接触という食物、意思という食物、識別作用という食物)が生きてし生けるものの生存のもととなっているとも説いている。その連絡がどうも解らない」と述べ、さらに「最初期の仏教においては『食料からの縁起』を説いていた。縁起説の一つとしてである」と述べ、Sn 747, 748 偈をその例として挙げている。森 [1995: 495-496] は縁起説の資料を整理して紹介しており、「十二支縁起枠外のヴァリエーション」のひとつに「四食の縁起(無明 行 識 名色 六入 触 受 愛 四食)」として、四つの経典を挙げているのみである。

(10) Aramaki [1985: 90-98] 参照。

(11) 宮坂 [1971: 183-184] 参照。

(12) T. 1552, p. 953a1.

(13) 平川 [1988: 409-413, 478] 参照。

(14) SN II, p. 13 (SN XII 12 Phagguno).これに対応する漢訳には「汝應問言。何因縁故識食。我則答言。能招未來有。令相續生。有有故有六入處。六入處緣觸」(T. 99 (372), p. 102a19-21) とある。また『阿毘達磨法蘊足論』巻第十一には、縁起説に対する註釈が見られるが、そのうち「識に縁って名色がある」と説く根拠のうちのひとつに、この経典「復次教誨頗勒蜜那經中。佛作是説。頗勒蜜那識爲食故。後有生起。此識云何。謂健達縛最後心。心意識增長堅住。未斷未遍知。未滅未變吐。此識無間。於母胎中。與羯刺藍自體和合。此羯刺藍自體和合。名爲色。即彼所生受想行識。名爲名。是名識緣名色」(T. 1537, p. 507c2-8) を挙げて説明している。このサンスクリット本には、*api khalv evam uktaṃ bhagavatā phalgunāvavāde vyāka(ṛaṇe / vijñānaṃ) phalguna āhāraṃ yāvad evāyatyaṃ punarbhavasyābhinirvṛttaye prādurbhāvāya (/) tat katarad vijñānaṃ (/) āha (/) yat tad gandharvvasya caramaṃ cittaṃ manovijñānaṃ ācītaṃ upacītaṃ pratiṣṭhitaṃ a[pra]ha - - - - - tam anirodhitam aśāntikṛtaṃ (/) yasya vijñānasya samanantaraṃ mātuḥ kuṣṣau kalalātmabhāvo 'bhisamṃrūcchati (/) kalalam ātmabhāvam abhisamṃrūcchati (/) idaṃ rūpasya tājā vedanā saṃjñā saṃ[skā](ṛāḥ) - - - - vijñānaṃ idaṃ nāmasya vijñānapratyayaṃ nāmarūpasya (/) tad ucyate vijñānapratyayaṃ nāmarūpaṃ (/) とある (Dietz [1984: 33])。また「名色に縁って識がある」と説く根拠のうちのひとつに、同じくこの経典「復次教誨頗勒蜜那經中。佛作是説。頗勒蜜那。識爲食故。後有生起。此識云何。謂健達縛。廣説乃至。與羯刺藍自體和合。此羯刺藍自體和合。名爲色。即彼所生受想行識。名爲名。爾時非理作意俱生名色爲縁。起俱生識。是名名色縁識」(T. 1537, p. 508a1-6) を挙げて説明している。このサンスクリット本には、*api khalv evam uktaṃ bhagavatā phalgunāvavāde vyākaraṇe / vijñānaṃ phalgunāhāraṃ yāvad evāyatyaṃ punarbhavasyābhinirvṛttaye prādurbhāvāya (/) tat katarad vijñānaṃ (/) āha / yat tad gandharvvasya caramaṃ cittaṃ vi[-] - - - - yasya gandharvvasya samanantaraṃ mātuḥ kuṣṣau kalalam ātmabhāvam saṃmūcchati (/) kalalam ātmabhāvaṃ saṃmūcchati (/) idaṃ rūpasya tājā vedanā saṃjñā saṃskārās tājā vijñānaṃ idaṃ nāmasya (/) ity etad**

ayoniśo[ma](*nasikārasa-*) haṃ nāmarūpaṃ pratitya mātuḥ kuṣau vijñānasyābhinirvṛttir bhavati prādurbhāvas (I) tad ucyate nāmarūpapratyayaṃ vijñānaṃ (I) とある (Dietz [1984: 36])。

他に、この經典は『阿毘達磨集異門足論』卷第八「頗勒鞞那記經中說。頗勒鞞那當知。識食能令當來後有生起」(T. 1536, p. 400c14-15)、さらに『阿毘達磨順正理論』卷第三十「由此佛告頗勒具那。我終不說有能食者。佛說四食名愛因緣。云何名為愛因緣義。所希愛事。為食體故。何緣於食。生於希愛。因此發生諸樂受故。緣樂受故。諸愛得生。諸愛已生。執為資具。由食是愛。隣近生因。若愛已生。復為資具。是故說食。名愛因緣。豈不食緣亦生於苦。不應但說名愛因緣」(T. 1562, p. 513a6-12) にも引用される。また縁起説とは直接関係のない文脈において、*Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu* (AKBh p. 468, l. 22-23), Yaśomitra の註釈 (AKV, p. 707) にも見られる。舟橋一哉 [1962: 23-24], 佐々木 [1984: 184], 福田 [1993: 10-18, 21-23 註 5, 10, 21, 22], 本庄 [1998: 102-104] 参照。

(15) Rhys Davids [1922: 9 note 3] 参照。

(16) SN II, p. 100 (SN XII 63 Puttamaṃsa). これに対応する漢訳には「如是觀者。識食斷知。識食斷知者。名色斷知。名色斷知者。多聞弟子。於上更無所作」(T 99 (373), p. 102c24-26) とある。

(17) これに対して Sāratthappakāsinī では、Nāmarūpan ti, viññāṇa-paccayā nāma-rūpaṃ. Viññāṇasmim hi pariññāte tam pariññātam eva hoti (Spk II, p. 113) (名色とは、識の縁から名色がある。識が遍知される時、それはまさに遍知される) と註釈しており、「識」と「名色」の縁起関係であると説明している。また『阿毘達磨大毘婆沙論』卷第百三十では、「若於識食已斷遍知者。則於名色亦斷遍知。以識是彼名色緣故。如契經說識緣名色。若於名色已斷知。則所作已辦故應思擇求斷識食」(T 1545, p. 678a7-11) と註釈しており、識食を斷遍知するならば、名色もまた斷遍知する、なぜなら識は名色の縁であるからと説明している。また、『阿毘達磨順正理論』卷第三十では「識能生起名色有芽。名色由識而生長故。由斯故說。若於段食斷遍知時。亦斷遍知五妙欲染。若於觸食斷遍知時。亦斷遍知樂等三受。若於思食斷遍知時。亦斷遍知欲等三愛。若於識食斷遍知時。亦斷遍知名色二有」(T. 1562, p. 511c14-19) と註釈しており、識は名色の有の芽を生起し、名色は識によって生長する、それゆえ識食を斷遍知するならば、名色もまた斷遍知すると説くのであると説明している。いずれも「識食」と「名色」の関係を「識」と「名色」の縁起関係によって説明づけている。

(18) SN II, p. 101 (SN XII 64 Atthirāgo); Nidd I, pp. 25-26; Kv pp. 142-143. これに対応する漢訳には「有四食資益衆生。令得住世攝受長養。何等為四。一者搏食。二者觸食。三意思食。四者識食。若比丘於此四食。有喜有貪。則識住增長。識住增長故。入於名色。入名色故。諸行增長。行增長故。當來有增長。當來有增長故。生老病死憂悲惱苦集。如是純大苦聚集」(T. 99 (374), pp. 102c29-103a6) とある。

(19) 中村 [1994: 516-517, 519 註 16, 17] は、この対応漢訳部分については、縁起説における「行」と「識」の関係について言及しているだけで、四食説については触れていない。また Pāli 部分については食について触れているが、このような考え方をいちじるしく実存主義的であると述べている。

(20) このことは、Visuddhimagga に viññāṇāhāro paṭisandhikkhaṇe nāmarūpaṃ āharati (Vism, p. 341) (識食は結生の刹那において名色を運ぶ) とあることと共通している。

(21) Katame cattāro // Kabaḷiṃkāro āhāro oḷāriko vā sukhumo vā // phasso dutiyo // manosañcetanā tatiyo // viññāṇaṃ catutthaṃ // Ime kho bhikkhave cattāro āhārā bhūtanāma vā sattānaṃ ṭṭhiyā sambhavesiṇaṃ vā anuggahāya // // Ime ca bhikkhave cattāro āhārā kiṃnidānā kiṃsamudayā kiṃjātikā kiṃpabhavā // // Ime cattāro āhārā taṇhānidānā taṇhāsamudayā taṇhājātikā taṇhāpabhavā // SN II, pp. 11-12 (SN XII 11 Āhārā); cf. Waldschmidt [1967: 284]. これに対応する漢訳には「有四食資益衆生。令得住世攝受長養。何等爲四。謂一麤搏食。二細觸食。三意思食。四識食。此四食何因何集何生何觸。謂此諸食愛因愛集愛生愛觸。此愛何因何集何生何觸。謂愛受因受集受生受觸。此受何因何集何生何觸。謂受觸因觸集觸生觸觸。此觸何因何集何生何觸。謂觸六入處因六入處集六入處生六入處觸。六入處集是觸集。觸集是受集。受集是愛集。愛集是食集。食集故未來世生老病死憂悲惱苦集。如是純大苦聚集。如是六入處滅則觸滅。觸滅則受滅。受滅則愛滅。愛滅則食滅。食滅故於未來世生老病死憂悲惱苦滅。如是純大苦聚滅」(T. 99 (371), pp. 101c26-102a10) とある。Pāli では「四食 渴愛 受 觸 六処 名色 識 行 無明」「無明滅 行滅 識滅 (略) 全苦蘊滅」のようになんかなり整備された構造となっており、十二縁起説に近い形となっている。漢訳では「四食 愛 受 觸 六入處」「六入處滅 觸滅 受滅 愛滅 食滅 未來世生老病死憂悲惱苦滅」という構造になっており、「無明」「行」「識」「名色」の支分が見られない。また、MN 38 Mahātaṇhāsankhaya-Sutta (MN I, pp. 256-271); T. 26, pp. 766b28-770a3) には、これとほぼ同じ内容の縁起説が説かれており、「四食 渴愛 ... 無明」「無明 ... 老死、愁悲苦憂惱」「無明滅 ... 老死、愁悲苦憂惱滅」「老死滅 ... 無明滅」という構造が見られる。他にも、MN 9 Sammādiṭṭhi-Sutta には、Cattāro 'me ... āhāra ... katame cattāro: Kabaḷiṃkāro āhāro oḷāriko vā sukhumo vā, phasso dutiyo, manosañcetanā tatiyo, viññāṇaṃ catuttho. Taṇhāsamudayā āhārasamudayo, taṇhānirodhā āhāranirodho ... (MN I, p. 48) とあり、「渴愛」と「四食」との縁起関係が見られる。これに対応するサンスクリット本には *catvāra āhārah / kabaḷiṃkāra āhāra au(d)ā(r)ikah sūkṣmaś ca / sparśo dvitīyaḥ / manaḥsa(n)cetanā ṭṭhiyaḥ / vijñānaṃ caturthaḥ / ima āhārāḥ / evam ā(hārān yathābhū)taṃ prajānāti / kim āhārasamudayaṃ yathābhūtaṃ prajān(āti / ṭṭṣṇā p)au(na)rbhavikī nandirāgasahagatā tatratatrābhinandinī / ayam āhārasamudayaḥ / eva(m āhārasa)mudayaṃ yathābhūtaṃ pra(j)ānāti / (NidSa (Sūtra 23), pp. 190-191) とあり、漢訳には「謂四食。何等爲四。一者麤搏食。二者細觸食。三者意思食。四者識食。是名爲食。如是食如實知。云何食集如實知。謂當來有愛喜貪俱。彼彼樂著。是名食集。如是食集如實知」(T. 99 (344), p. 94b29-c4) とある。他に、T 26, pp. 461c26-462a1) にも「渴愛」と「四食」との縁起説が説かれている。SN XII 11 Āhārā および MN 9 Sammādiṭṭhi-Sutta における四食説について、註釈書では ... viññāṇāhāro paṭisandhināmarūpan ti. Kathaṃ? ... Viññāṇāhāro pana ye paṭisandhikkhaṇe taṃ sampayuttakā tayo khandhā yāni ca tisantativasena tiṃsa rūpāni uppajjanti saḥajātādipaccayena tāni āharatī ti vuccati. Evaṃ viññāṇāhāro paṭisandhināmarūpaṃ āharati. (Spk II, pp. 25-26 = Ps p. 209 = Ss pp. 192-193) (... 識食は結生の名色を [ 運ぶ ] どのようにしてか。...次に結生の剎那にそれと相応した三蘊と三相続しての三十の色が生じるが、識食は俱生などの縁としてそれらを運ぶと説かれる。このように識食は結生時の名色を運ぶ) と註釈している。浪花 [1989: 350-351] 参照。ちなみに、宮本 [1974b: 971-972] は taṇhā に条件づけられる āhāra と upādāna との同義性について*



- て述べている。
- (22) SN III, p. 53 (SN XXII 53 Upāyo); III, pp. 54-55 (XXII 54 Bijam); III, p. 58 (XXII 55 Udānaṃ); T. 99 (40), p. 9a29-b2; (39), p. 9a7-10; (64), p. 17a1-3.
- (23) 他に、DN III, p. 228 (DN xxxiii Saṅgīti-Suttanta); Nidd I, p. 25; Nidd II, p. 245 にも見られる。
- (24) 雲井 [1967: 407-408, cf. 353-355].
- (25) 梶山 [1984: 351] 参照。
- (26) Aramaki [1985: 90-98] 参照。
- (27) SN II, p. 65 (SN XII 38 Cetanā (1)); Nett pp. 153-154.これに対応する漢訳には「若思量。若妄想生。彼使攀緣識住。有攀緣識住故。有未來世生老病死憂悲惱苦」(T. 99 (359), p. 100a24-26) とある。
- (28) SN II, p. 67 (SN XII 40 Cetanā (3)).これに対応する漢訳には「若有思量。有妄想。則有使攀緣識住。有攀緣識住故。入於名色。入名色故。則有往來。有往來故。則有生死。有生死故。則有未來世生老病死憂悲惱苦」(T. 99 (361), p. 100b12-16) とあり、「思量 妄想 識住 名色 往來 生死 未來世生老病死憂悲惱苦」という関係が見られる。
- (29) AN I, pp. 223-224 (AN III 76) には、緣起説ではないが、「識の安住」から「未來における後有の再生」があることが説かれている。Iti kho Ānanda kammaṃ khettaṃ viññāṇaṃ bijaṃ taṇhā sineho avijjānīvaraṇānaṃ sattānaṃ taṇhāsaṃyojanānaṃ hināya dhātuyā viññāṇaṃ patiṭṭhitaṃ. Evaṃ āyatim punabbhavābhiniḍḍanti hoti. Evaṃ kho Ānanda bhavo hoti ti.
- (30) SN II, p. 66 (SN XII 39 Cetanā (2)).これに対応する漢訳には「若思量。若妄想者。則有使攀緣識住。有攀緣識住故。入於名色。入名色故。有未來世生老病死憂悲惱苦」(T. 99 (360), p. 100b3-6) とある。
- (31) 森 [1995: 489] はこの經典を十支緣起に分類しており、また水野 [1997: 40] はこの經典について「識と名色との芦束の関係を述べた十支緣起と同じものと思われる。…所緣とあるのを名色とすれば、名色と識が芦束の関係となるからである」と述べている。また、AN III 61 (AN I, p. 176) に説かれる「六界(地・水・火・風・空・識) 入胎 (gabbhāvakkanti) 名色 六処 觸 受」の関係について、入胎とは識の結生と考えられるから、これは胎生学的な緣起を説いたものであろうと述べ、さらにこの関係を「名色(六界) 識(入胎) 名色...と見てよいかもしいない。六界は識の所緣としての名色とすることができるからである」と述べている。
- (32) DN II, pp. 62-63 (DN xv Mahānidāna-Suttanta).これに対応する漢訳には「阿難。緣識有名色。此為何義。若識不入母胎者。有名色不。答曰。無也。若識入胎不出者。有名色不。答曰。無也。若識出胎嬰孩壞敗。名色得增長不。答曰。無也。阿難。若無識者。有名色不。答曰。無也。阿難。我以是緣知。名色由識。緣識有名色。我所說者義在於此。阿難。緣名色有識。此為何義。若識不住名色。則識無住處。若無住處。寧有生老病死憂悲惱不。答曰。無也。阿難。若無名色。寧有識不。答曰。無也。阿難。我以此緣知。識由名色。緣名色有識。我所說者義在於此。阿難。是故名色緣識。識緣名色」(T. 1, p. 61b8-20) とある。この部分に対応するとされる漢訳は他に、T. 26, pp. 579c14-580a2; T. 14, p. 243b16-c3; T. 52, p. 845b5-15 に見られる。また、『阿毘達磨法蘊足論』巻第十一に見られる緣起説に対する註釈のうち、「識に緣つて名色がある」と説く根拠のうちのひとつに、この經典「復次大因緣經中。尊者慶喜問佛。名色爲有緣不。佛言有緣。此緣謂識。佛告慶喜。

識若不入母胎藏者。名色得成羯刺藍不。阿難陀曰。不也世尊。識若不入母胎藏者。名色得生此界中不。不也世尊。識若初時已斷壞者。後時名色得增長不。不也世尊。識若全無爲可施設有名色不。不也世尊。是故慶喜。一切名色。皆識爲縁。是名識縁名色」(T. 1537, p. 507c14-22) を挙げて説明している。このサンスクリット本には、*asti khalv evam uktaṃ bhagavatā mahānidānaparyāye vyākaraṇe āyusmate ānandāya (/) asti pratyayam ānanda nāmarūpaṃ (/) pṛṣṭaiḥ sati astity asya vacaniyaṃ (/) kiṃpratyayam ānanda nāmarūpaṃ (/) vijñānapratyayam iti syād vacaniyaṃ (/) vijñānapratyayam ānanda nāmarūpaṃ (/) iti mayā yad uktam idaṃ me tat pratyuktaṃ (/) vijñānaṃ ced ānanda mātuḥ kuḥṣau nāvakkramiṣyad api nu nāmarūpaṃ kalalataṃ hi saṃmūrcchiṣyat (/) no bhadanta (/) vijñānaṃ ced ānanda māhuḥ kuḥṣau nāvakkramitvā puna -- tkramiṣyat api nu nāmarūpaṃ imaṃ dhātum āgamiṣyan (/) no bhadanta (/) vijñānaṃ ced ānand[ā]dāv eva dahra(m a)sya taruṇasya kumārakasya [u]cchidyeta vinaśyeta na bhaveta api nu nāma[rū](*paṃ vi*)rūḍhiṃ vaipulyatām āpadyeta (/) no bhadaṃta (/) sarvvaśo vā punaḥ sarvvaśa ānanda vijñāne asati na nāmarūpaṃ prajñāyeta (/) no bhadaṃta (/) tasmād dhi ānanda etan nidānaṃ eṣa hetuḥ eṣa pratyayo [nā](*marūpasya*) yad uta vijñānaṃ (/) vijñānapratyayam ānanda nāmarūm (/) iti mayā yad uktam idaṃ me tat pratyuktaṃ // とある (Dietz [1984: 34-35])。また「名色に縁って識がある」と説く根拠のうちのひとつに、同じくこの経典「復次大因縁經中。尊者慶喜問佛。諸識爲有縁不。佛言有縁。此謂名色。佛告慶喜。若無名色。諸識轉不。阿難陀曰。不也世尊。若無名色爲所依止。後世所受生老死識。爲得生不。不也世尊。若諸名色。都無所有爲可施設。有諸識不。不也世尊。是故慶喜。諸識皆以名色爲縁。是名名色縁識」(T. 1537, p. 508b2-8) を挙げて説明している。このサンスクリット本には、*api khalv evam uktaṃ bhagavatā mahānidā[napa]ryāye (/) vistareṇa yāvad (/) vijñānaṃ ced ānanda nāmarūpapratiṣṭhāṃ na labheta tathāpratiṣṭhite vijñāne anatirūḍhe [-] -- -- bhavasamudayasamutthāpakam jātijarāmarāṇam abhinirvva[rtteta] (/) no bhadanta (/) sarvvaśo vā punar ānanda nāmarūpe asati api nu vijñānaṃ prajñāyeta (/) no bhadanta (/) tasmād ānanda etan nidānaṃ vistareṇa yathā pūpvoḥktaṃ (/) とある (Dietz [1984: 36])。福田 [1993: 2-5,17] 参照。**

(33) 宇井 [1965: 311-312] は、この SN XII 38 Cetanā (1), 39 Cetanā (2) について「…明確に輪廻に結付けて解釋することになつて居ることは争はれぬ事實である」と述べ、さらに DN xv Mahānidāna-Suttanta に説かれる「識」と「名色」の縁起説について「…名色と識が俟相つて生々死々の状態あることを述べて居るのは明に既に名色を胎兒として解し其中に識の發動して存續するを識の顯現并に住 (*patiṭṭhā*) といふたのであることが表はれて居る」と述べている。また、赤沼 [1939: 247-249] は、SN XII 64 Atthirāgo, 38 Cetanā (1), 39 Cetanā (2), 40 Cetanā (3) などの経典を挙げて、「このやうに未來の生老死となつてある所から見ると、宇井博士のやうに、十二縁起は絶対に輪廻を示して居ないとも云へないと思はれる」と述べている。

(34) 『阿毘達磨大毘婆沙論』卷第二十三には、「…名色縁識説識住差別。…名色縁識説續生已安住時。…識爲縁故名色續生。名色爲縁識得安住。故説此二更互爲縁。復次識縁名色説初續生時。名色縁識説續生後位。復次識縁名色説續生時識能生名色。名色縁識説續生後識依名色住」(T. 1545, pp. 119c27-120a23) とあり、識住説を根拠として、「識」と「名色」との相互依存関係を説明している。

またさらに、同巻第二十四には、「名色有故識有。此識名色爲縁。便作是念。我齊此識心應轉還。所以者何。名色縁識。識縁名色」(T. 1545, p. 124a20-22) という『城邑経』の経文が引用されており、また「問菩薩何故逆觀縁起。唯至於識心便轉還」(T. 1545, p. 124a26-27) という問いに対する種々の解釈が紹介されている。そこには「尊者世友作如是説。何故齊識心便轉還。以識樂住識住中故。謂識不欲捨於識住。識住者即名色。故觀識已還觀名色」(T. 1545, p. 124c6-9) という世友の説が紹介されている。このことは『阿毘達磨順正理論』巻第二十九に見られる「然結生識。有二生縁。一者前生。二者俱起。…今觀名色。爲俱生縁。故至識還心不復轉。…如何名色爲識俱縁。以於此中識住著故。如經説識住除識餘名色。前以住著釋識住義」(T. 1562, p. 504c19-27) という衆賢の説と共通している。つまり、世友と衆賢の説によれば、『城邑経』に見られる「識」と「名色」との相互依存関係は識住説を根拠としていることがわかる。榎本 [1982], 梶山 [1984: 324f.] 参照。

(なかそね みつのが 文学研究科仏教学専攻博士後期課程)

(指導教授：並川 孝儀教授)

2002年10月16日受理